

牧師のアイデンティティ

—困難な時代にある教職者たち—

福音主義神学会西部部会春の研究会議

2009/4/20 神戸ルーテル神学校

工藤弘雄

はじめに

教会の閉塞感や、牧師の燃え尽き症候群が取りざたされて久しい。それらは牧師の牧師たることという牧師のアイデンティティの喪失や今日の時代の困難性と切り離せない事柄であると思われる。しかし、これらのテーマは、今日の問題だけでなくいつの時代においても問い続けられる課題であると思われる。キリスト教の草創期においても、教会は外からの迫害や内側の異端との戦いに直面してきた。キリスト教が天下をとった時代においては、異教化、形式化、世俗化が教会に侵入した。「金銀は我になしという時代はもはや終わった」と豪語する教皇は、「我にあるものを汝に与う」という聖職者のアイデンティティを完全に喪失してしまった。宗教改革期から近世、近代においても、教会は様々な困難な時代に直面し、教職者たちのアイデンティティが問い続けられてきた。

現在私は、神学校の教師として、また一地方教会の牧師として主のご奉仕に携わっている。私の牧会経験は、神学校を卒業して、日本イエス・キリスト教団垂水教会において、中島彰牧師の下で伝道師、副牧師としての6年間、続いて神学校の舎監、学監、校長代行時代の20年余、大阪にある二つの教会（安威キリスト教会、日本基督教団東淀川教会）の協力奉仕をさせていただいたこと、そして、現在の岡山県備前市にある香登教会での主管牧師として11年間の奉仕ということで、牧会者としての経験は極めて未熟で、不十分なものであると自覚している。

神学校の教師として、一地方教会の牧師として、困難な時代と言われるこの時代に、いかに牧師のアイデンティティをもって主のご奉仕をさせていただくかの所感を述べたいと思う。

1. 一地方教会のケーススタディ

—香登教会の現状分析—

現在奉仕をさせていただいている日本イエス・キリスト教団香登教会は、備前市香登に位置している。JR赤穂線香登駅は無人駅で、昼間は相生と岡山へ向かう上下線が1時間に1本、国道2号線を走る路面バスを利用する乗客も極めて少ない。信徒のほとんどはマイカーで教会に通う。備前市は岡山東部の広範な地域に点在する町村を併せてできた人口約4万人の市である。市の財政は岡山県下でワースト2と言われている。少子高齢化、「備前焼」などの地方産業の衰退など、時代の波はひたひたと教会にも押し寄せている。

さらに、依然根深く残る異教風土の問題もある。また、私の赴任時代はほとんどの家は戸締まりの必要もなく、礼拝堂も施錠なく終日オープンであったが、最近では付近一帯に盗難、強盗が頻発する。肌身で感ずる「困難な時代」は一地方教会とも決して無縁ではない。

香登教会が岡山組合基督教会から独立して設立されたのは1895(明治28)年の秋である。しかし、それ以前、1880(明治13)年岡山教会が設立されてから、1881年には香登在住の受洗者が起こされ、1888(明治21)年には定住伝道者による香登基督教講義所が起こされている。初代牧師の溝手文太郎は神戸組合基督教会で松山高吉牧師から受洗。1889(明治22)年、同志社神学部において新島襄から卒業証書を受けている。香登教会赴任以来、バックストーンや石井十次との交わりが深められ、組合教会が総じて新神学になびく中でも正統的聖書信仰を堅守した。1905(明治38)年、香登教会は親教会の岡山教会と組合教会の流れから全く離れ、独立の道を進んだ。バックストーン、ウィルクス、河辺、笹尾、竹田らによる香登修養会は「有馬修養会を西日本に」とのヴィジョンで開催されるようになった。この明治後期から大正年間に行われた香登修養会は、1961(昭和36)年、高橋虎夫牧師時代に復活し、今日に至っている。やがて、溝手牧師は香登から倉敷教会に転出、倉敷教会の初代牧師となった。ちなみに、大原孫三郎は溝手牧師に導かれ回心している。また、香登基督教講義所と呼ばれた時代に若き日の作家、正宗白鳥と弟で国文学者の敦夫は熱心に講義所に通っている。大正年間に入ると佐藤邦之助牧師を迎え、伝道牧会は一層活発化した。1921(大正10)年には賀川豊彦による「神の国運動」が香登、片上、牛窓、邑久で展開、1923(大正12)年、中田重治から紹介された弘前教会会員桜庭駒五郎が一時香登教会に籍を移し、設計者として棟梁として会堂建築に取り組み信徒の献金や浄財により大正の名建築と言われる礼拝堂が建築された。現在、岡山県の近代化遺産として登録されている。1930(昭和5)年、香登教会を中心に、12教会で「イエス・キリスト召団」設立、これはやがて1935(昭和10)年、日本伝道隊系聖書教会と合流しイエス・キリスト教会となり、戦後、1951(昭和26)年設立された日本イエス・キリスト教団の核ともなった。

都市から地方への教会進出はあるが、香登教会と岡山市の岡南教会とは逆で、香登教会設立に関わった武用五郎兵衛商店の香登から岡山進出に伴い、佐藤邦之助牧師が香登教会から岡山市へ転出、岡南教会の基礎を築き、初代牧師として岡南教会を形成した。佐藤牧師の後を継いだ鈴木一郎牧師は言う、「香登教会は佐藤牧師を作った教会であり、岡南教会は佐藤牧師により作られた教会である」。

現在、香登教会は、現住陪餐会員が300名余、早朝礼拝、午前礼拝の出席者は幼児、児童を含め、平均150-160名、主日夜の伝道集会は約20名、水曜日のみことばと祈り会は午前、午後あわせて35-40名、地区家庭集会は邑久、福岡、飯井、柏山、伊部、片上、木生、山陽、熊山など9地区、教会学校は本校、幼・小学生科、中高科に分校は6校、クリスチャンホームは60家族を越える。財政面では一時は通常会計が年間3,000万円、現在は、2,700万円前後、教職は主管牧師夫妻、牧師、伝道師夫妻、教会役員は12名。戦中の大嶋常治牧師夫妻の苦難の時代を経て戦後の教会形成では中島彰牧師夫妻、特にその後を継いだ高橋虎夫牧師夫妻の39年間は今日の香登教会の形成のすべてと言っても過言ではない。

「困難な時代」の様々の要因、たとえば会員の高齢化問題、異教風土の地域との関わりなど諸要因をかかえている。75才以上の会員は80名を越える。しかし、高齢者の多くはいのちをかけるようにして礼拝を死守、不動の活会員となっている。地域社会において伊

部の一地区（中野1班）では、クリスチャン・ホームが28軒中11軒で40%弱となっている。この地区では先人のクリスチャンの戦いと良き証しの結果、教会員は神社の関わりから完全に分離、偶像との戦いは皆無で公けに信仰の自由を有している。備前市の初代市長も教会員から選ばれ、教会の認知度は高い。一面備前市における教会の存在感は高く、市長選などの前には候補者やその関係者の姿が礼拝者の中にある。また、主だった教会のイベントには歴代の市長も出席している。かつては、香登小学校の運動会には必ず牧師が招待されていた。広大な範囲にまたがる本教会を分散させ、いくつかのチャペル(分教会)を点在させる宣教方策も考えられるが、世俗、異教社会に対して教会というアイデンティティをアピールするためには、多くの礼拝者が一堂に集まる教会の存在の方がインパクトがあるのではないかと、前任者の高橋牧師と共に後任者の私の持論でもある。その代わり宣教の拡大は、地区集会、分校、そして、二つの伝道所を拠点に行っている。

私の着任前まで、会堂建築問題が大きな課題としてあった。古い礼拝堂を倒して新しい会堂を建てるか、それを大改修するか。この二つの「正論」が正面から衝突するという試練の時でもあった。高橋牧師時代のヴィジョンと祈りとささげものを受け継ぎつつ、忍耐の時を経て、聖霊の働きの中で、「古きを活かし新しきを開く」というスローガンが与えられ、大正の名建築である現礼拝堂を力を尽くして修復、改修し、地域に開かれた新しいホールを境内地いっぱい力を尽くして建築するという新会堂プロジェクトの建築理念が定まり、2001年、250名収容のゴスペル・ホールと礼拝堂大改修という「新会堂プロジェクト」が完成した。さらに2007年には隣接地240坪と二つ建物が購入され、一つの家屋は、現在7人の子供を持つ伝道師一家に用いられている。一つは「憩いの家」（交わりの場であるイコイノヤ）と命名された。駐車場は200-250坪が3面。礼拝堂、ゴスペル・ホール、ゲスト・ハウス、牧師館などの教会の全ての施設は牧会伝道、香登修養会などにフルに活用されている。ちなみに「古きを活かし新しきを開く」はその後牧会伝道のあらゆる面でのキーワードとなっている。加えて、備前市一帯の伝道と共に世界宣教のヴィジョンが与えられ、諸教会と重荷を分かち合い、一宣教師家族を中国に送っている。「香登は地の果て世界の中心」という大それたスローガンも教会の合い言葉の一つとなっている。高齢者や弱い方々に対する牧会伝道の一つに「訪問聖餐」(在宅聖餐)の積極的導入がある。「春になったらほうてでも礼拝に行きます」という一老婦人の言葉に、「おばあちゃん！おばあちゃんが来られなければ教会が来ます」というやりとりがきっかけで2003年春から訪問聖餐を取り入れた。むろん「お寺さん」の檀家周りに負けてなるものか、との執念めいたものも働いていたことも否めない。毎月、第1主日の聖餐式礼拝後、牧会者たちが2組に分かれて、十数件、訪問聖餐を行う。多くは召天直前まで「現役」で聖餐の恵みを受け、主のみ前に立つ。

主管牧師が神学校の校長に就任して以来、週日の集会はすべて牧師、伝道師が責任を持っている。ただ、春、秋、特別に水曜日夜、「香登信徒聖書学校」のシリーズを開き、主管牧師夫妻が神学生と共に日帰りでご奉仕をする。40-50名の老若男女の「生徒」が熱心に受講する。また、神学校の夏、冬の授業のない週日、年に2回、数カ所で「地区特別伝道週間」を持つ。求道者、新来会者が延べ十数人は出席する。年に2回の土、日の特別伝道集会には戸別案内。3年間で備前市全戸配布を目指す。特集と共に、夏、クリスマスの音楽伝道礼拝、夏の香登修養会、秋の聖化大会、岡山刑務所クリスマスなどでは聖歌隊が

奉仕をする。隊員登録は約 40 名、本番は 30 名前後。クリスマス・ジョイント・コンサートは 200 名ほどの出席者。ノン・クリスチャンが約半数。休憩の時間を取らず、15 分のショート伝道説教を入れる。特別集会やインフォーマルな礼拝はすべてゴスペル・ホールで行う。特殊の伝道としては、教会学校の聖書学校(キャンプ)、中高生バイブル・キャンプに加えてイングリッシュ・キャンプを導入。ノン・クリスチャンの出席も多い。伝道の名を付けない最も厳かな伝道は葬儀、告別式。年に数回。これを通して救われた者、信仰回復をした者はここ 10 年で 10 名に近い。「純粋な動機で純粋な福音を語って、たましいが救われなかったためしはない！」恩師向後昇太郎の言葉が耳から離れない。これこそ、牧師、伝道者の自己証明、アイデンティティの言葉ではないか。

2. 牧会者の苦悩と光栄

—ガラテヤ書 4 章 12 節～19 節における使徒パウロの牧師像—

牧会者パウロの姿、牧会者パウロの牧会的勧告については、使徒行伝や彼の書簡の随所に見ることができる。特に、「牧会書簡」においてはそれが顕著である。しかし、教理的、神学的色合いの濃いガラテヤ書に彼の「牧師のアイデンティティ」をたずねることは意外と思われるかもしれない。ところがガラテヤ書 4 章 12 節-19 節にパウロの牧師像の一断面を見ることができるとは驚きである。「牧師のアイデンティティ」を新約聖書の中から総合的に考察することが適切であると思われるが、それは余りにも多岐に渡り、講演者の力量のとても及ぶところではない。それで、ガラテヤ書 4 章 12 節-19 節に限定して、使徒パウロの「牧師のアイデンティティ」を探って見たい。

このテキストには大きな語調の変化が見られる。今までの叱責の調子はがらりと変化し、勧告、懇願の語調となる。神学者パウロ、信仰の擁護者パウロ、弁証家パウロの姿は消えて、人間パウロ、牧者パウロ、熱愛の人パウロに急変する。深い愛情、想像を絶する優しさを込めて、「兄弟たちよ」と呼びかけ、ついには、「ああ、わたしの幼な子たちよ」と牧者は呼びかけている。

1) 牧会者の姿勢

牧師の牧師たること、これを喪失しては牧師ではなくなるという「牧師のアイデンティティ」を 12 節のパウロの懇願に見いだすことができる。「兄弟たちよ、お願いする。どうか、わたのようになってほしい」。牧師のアイデンティティの本質はこの言葉の中に発見する。「お願いする。どうか、わたしのようにしてほしい」と言い得ない牧師がいるとすれば、それは牧師のアイデンティティを喪失したことになる。およそ、伝道、牧会の目的のすべてはこの言葉にかかっていると言い得る。

伝道とは、煎じ詰めれば、「わたしのようにしてほしい」と懇願することである。パウロは、アグリッパ王の前でも、彼の鎖は別として、「わたしのようにしてほしい」と訴えた(伝道 26:29)。キリスト者の両親が子どもに願うことはこれと同様であろう。救いの恵みを体験した回心者が未回心者のために切に祈り訴えることはこの一事であろう。

牧会においても同様である。牧会の目的とは牧者が信徒に「わたしのようになってほしい」と訴え願うことである。ピリピ教会に対して、パウロは、「兄弟たちよ。どうか、わたしにならう者になってほしい。また、あなたがたの模範とされているわたしたちにならうて歩く人たちに、目をとめなさい」（ピリ 3:17）と勧めている。「私を見ないで、イエス様を見てください」と言う牧師がいるとすれば、いかにも謙遜に見えてこれほど無責任な話はない。むしろ、牧師の人格、特性、生活、趣味などにおいて、「私のようになれ」と言っているわけではない。キリストこそがわが生命、模範、目標、動力であるとのキリスト体験、キリストを知ることのあまりのすばらしさ、キリストを通して与えられる救いの全貌とその人格的知識の感動において、「わたしのようになってほしい」と言い得る牧者は幸いである。

コリント書 15 章において、パウロは、「わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によって救われるのである」（15:2）と語っている。そして、その「わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えた」福音は、「わたし自身も受けた」もので、キリストの死と葬りと復活と顕現であると語る。そして、パウロには「この神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである」（15:10）と証しする。だから、「わたしのようになってほしい」とは神の恵みの体験において「わたしのようになってほしい」と言うことに他ならない。この神の恵みによって、パウロは使徒たちの中でだれよりも多く働いた。しかし、それは彼自身の功績ではなく、すべてが神の恵みであったのである。

ローマ書 1 章 5 節において、パウロは「彼によって恵みと使徒の務とを受けた」と言っている。使徒たることは神の恵みによるほかはないが「恵みは人をして使徒たらしめる」とも言い得る。牧師のアイデンティティの喪失があるとすれば、それは牧師の恵みの不徹底、キリストの福音に対する驚き、感動、感謝の不徹底にあると言い得る。福音にインプレスされていない者が、どうして福音をエクスプレスできようか。

今日、キリスト教会を脆弱にしている一事は教会が恵みに徹しきれていないところにあると言える。罪の赦し、信仰義認、聖化の恵み、栄光の望みなど、今さら並びたてる必要もないが、どれ一つとっても感泣のほかなしの恵みばかりである。「神の恵みによって、私は今の私になりました」（コリント 15:10、新改訳）。だから、その「私ようになってください」と言い得るところに牧師のアイデンティティがあり、伝道、牧会の目的があるのではないだろうか。「金銀はわたしには無い。しかしわたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」（使徒 3:7）とあるように、この「わたしにあるもの」を持っていない教職者がいるとすれば悲劇である。

「わたしのようになってほしい」「わたしにあるものをあげよう」、「わたしは福音を恥としない」（マ 1:16）という「我」は福音に捕われた「我」である。それは、ルターが「我ここに立つ」という「我」に通じもし、「キリスト者は自由な君主であって、何人にも従属しない」という「王者としての我」である。福音の最善の保証は神の力（デユナミス）、福音の最大の恵みは、罪の刑罰（penalty of sin）、罪の力（power of sin）、罪の存在（presence of sin）からの救い、福音の最大の数は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも「すべて」、そして福音の最低の条件は、信仰のみ。「我にあるもの」を汝に！この「我にあるもの」こそが福音の恵みと真理に他ならない。そして、この「福音化された我」にならう者になってほしいと懇願するところに「牧師のアイデンティティ」があるのではなからうか。

「わたしのようにしてほしい」と言い得る牧者は続いて「わたしも、あなたがたのようになったのだから」と言うことができる。ここに伝道、牧会の手段がある。伝道、牧会の手段とは他者と同一化することである。「あなたがたのようになる」。牧会の手段、伝道の手段はこれに尽きる。伝道、牧会の目的が「わたしのようになる」ことであるなら、その手段は「あなたがたのようになる」ことである。キリストが神であられながら「全く人となられた」と言っている。このインカーネーションが宣教の手段と言える。受肉の福音はまた福音の受肉化と発展する(北森)。「わたしがわたしである」というアイデンティティを失わず「全く他のものとなる」。これが牧会、伝道の手段と言い得よう。これは、福音の文化脈化(contextualization)にも通じるものであるが、何よりも今日の伝道現場、牧会現場の死活問題ではある。

パウロは、コリント書においても「わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった」(Ⅰコリント 9:19)と言っている。ユダヤ人、律法の下にある者、律法のない人、弱い人、そして「すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである」(Ⅰコリント 9:22)と語っている。福音化された人格がすべての人を救うために愛をもって同化して行く。ここに福音宣教があり、牧会伝道がある。福音化された「自由な君主」であればこそ、すべての人に仕える「愛の奴隷」となることができる。キリストとその福音以外何ものにも従属しない自由な君主であればこそ愛の奴隷としてすべての人に従属化して行くことができる。実に、牧師のアイデンティティの原点を使徒パウロに、宗教改革者ルターに見出すことができよう。このすべての人への従属化はキリストのみ苦しみのパーティーカー(partaker)に発展する。「だれかが弱っているのに、わたしも弱らないでおれようか。だれかが罪を犯しているのに、わたしの心が燃えないでおれようか」(Ⅱコリント 11:29)。牧会伝道とは、キリストのからだの弱さをにない、罪のために燃えることである。高齢者から児童、幼児まで、成熟した信仰者から求道者まで、すべての人のようになる。すべての人に同化し、従属する。異教社会における他者に対してもすべての人のようになる。ここに、ブレのない牧師のアイデンティティがあるであろう。

2) 牧会者の苦悩と光栄

ガラテヤ書4章12節後半から15節までには信者の牧師への愛が記されている。いつの時代であれ、どこの教会であれ、これこそは牧者の受ける身に余る光栄と言える。ガラテヤの教会は牧者の肉体的病いという外的障害を克服する愛をもっていた。さらに、牧者を神の使いかキリストかでもあるように受け入れた。そればかりか、牧者に対し、「自分の目をえぐり出してでも」というほどに最高のものを与える愛をもっていた。

牧師のハンディキャップやマイナス面を克服する愛、神の使いかキリストかでもあるように受け入れる愛、自分たちのもつ最高のものを与える愛。こうした信者の牧師への愛を今日の牧師たちも様々なかたちで受けてきている。身に余る光栄と言うほかはない。

ところが、16節以下を見ると、それほどまでに牧者を愛し敬った信者が豹変する。ガラテヤの信者のように牧者を慕い、敬い、愛していたすばらしい信徒でも豹変がありうるのである。パウロほどの牧者であっても、こうした苦渋をなめたとすれば、このような痛み

を経験しない牧者があるだろうか。牧師が牧師である以上、信者の身に余る愛を受けない牧師はいない。それを受く牧師が牧師である以上、信者の豹変で苦しめない牧師もいないであろう。牧者パウロはコリント教会でもこれを経験した。むろん、マケドニアの諸教会のような教会はある。それとても心配が無縁であったのではない。しかも、その信者の変貌は避けられない形でやってくる。ガラテヤの教会の場合、原因は二つ。一つは、牧者が真っ向から真理を語ったこと。二つは、偽教師という異分子が侵入したことである。特に、異分子の教会の乗っ取りほどの痛みはない。しかし、牧師のアイデンティティというか、牧師の存在価値、牧師の真価が問われるのは、信者に慕われ、敬われ、愛されている光栄の時ではなく、信者が豹変し、牧者と信者の亀裂という激痛の中にある時である。

3) 牧会者の究極的使命

牧者と信徒の間に亀裂が走るという痛みと苦悩の中で真の牧者はいかにあるべきか。これは牧師のアイデンティティの最も問われる時ではないか。牧師が牧師であるという真の牧師の存在意義、あるいは牧師の究極的な使命は何か。それが問われるのが牧会における痛みと苦悩の中においてある。また、牧師が真に神に属しているか、御霊に属し、御霊によって歩んでいるか、肉なるものが十字架に磔殺され、御霊の人になっているか、そのスピリチュアリティが問われるのもこの時であると言える。

真の牧師か偽教師、偽牧師、あるいは肉的牧師かの識別は、不純な愛か純粋な愛かによってなされる。偽牧師は信徒を自分にひきつけさせることに熱心である。しかし、真の牧者はいかなる場合においても信徒をキリストに結びつけようとする。「わたしのようになってほしい」という牧会伝道の目的は、結局は信徒を自分に結びつけるのではなく、キリストに結びつけることなのである。

信徒と牧者の間に亀裂が走る時、牧者は何とか信徒と自分との間を改善するために自分に信徒を結びつけようとする誘惑がある。しかし、かえってそれは牧者と信徒の傷を深め亀裂を大きくするという悲劇的な結果になることがほとんどである。牧会者の喜びは、むろん信者に「良いことにおいて慕われる」ことである。しかし、牧会者の最大の願望は、信者を徹底してキリストに結びつけることであり、信者の中に「キリストの形ができる」ことである。そのために、牧者は「産みの苦しみをする」。牧師の究極的な使命はここにある。「ああ、わたしの幼な子たちよ。あなたがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをする」(4:19)。豹変し、苦しめる信徒に対し、なおも、「ああ、わたしの幼な子たちよ」と呼びかける愛情、そして、彼らの中にキリストの形ができるまで産みの苦しみをするという労苦なくして、牧師の牧師であるという存在意義は失われる。

ローマ書においても使徒パウロは牧師の究極的な使命を新約における祭司の務めと記している。「このように恵みを受けたのは、わたしが異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を勤め、こうして異邦人を、聖霊によってきよめられた、御旨にかなうささげ物とするためである」(ローマ 15:16)。神の恵みの体験、福音化された我とは、キリストの内的形成に他ならない。牧師の牧師たることとは自分の中に、神の恵みによってなされるキリストの内的形成であり、その神の恵みを「聖霊の力に

よって、働かせて」(マ 15:19) 信者の一人一人に具現させることである。

3. 伝道共同体と礼拝共同体の統合体である教会に仕える牧師

牧師の牧師たる姿は「イエス・キリストの仕え人」に尽きる。福音の本体は教理でも倫理・道徳でもない。福音とはイエス・キリストご自身である。イエス・キリストというお方を宣べ伝え、紹介し、このお方に結び合わせ、その御姿にまで形成することが伝道と教会の目的である。イエス・キリストに仕える(マ 15:16) という用語、レイトウルギアはリタージーの語源となった。今日、礼拝を司る牧者が何を至高の目的として奉仕するか。それはすべての信仰者を「聖霊によってきよめられた、御旨にかなうさきげ物」とすることであると言える。煎じ詰めて言えば、牧者の志向するものは、キリストの体である教会が「神の像の回復」と「神の国の完成」に至ることである。ただ、あくまでもそれは目指すところのものであって、キリストの体なる教会は「既に」と「未だ」の中間時に存在する地上における戦闘の教会であることを忘れてはならない。この戦闘の教会には二面性がある。一面は「伝道共同体としての教会」であり他面は「礼拝共同体としての教会」である。

伝道共同体に仕える牧師のアイデンティティは言うまでもなく救霊者である。人々を今の「悪しき世、悪の時代」というサタンの支配、アイオーンから救出し、神の民、礼拝の民として神に近づけて行く。これが唯一、最高の「牧師の仕事」である。「困難な時代」としての様々な要素は枚挙にいとまがない。この世とこの時代に生きる牧者として、この「困難な時代」の要素を分析、解明することなくして伝道、牧会は立ち行くことはできない。しかし、全時代の根底に横たわる「悪しきアイオーン」は不変、不動である。「困難な時代」に目を奪われて、「悪しき時代」を見失うとすれば、伝道、牧会は根底からくずれぬ。救霊者である牧者は、悪魔の支配する時代にあつて、罪の奴隷になっている者を御子の贖罪のみわざをもって解放する。徹底した罪の指摘、鮮明な贖罪のみわざの提示、明確な信仰の決断へのうながし。こうして魂を救いに導くことのできない牧者は牧師たるアイデンティティを喪失した牧師と言えよう。今日の「困難な時代」の一事例に性道徳墮落の低年齢化がある。性の規準と尊厳性が聖書のそれらから著しくかけ離れている今日、若者たちを聖書の光と恵みの中に導くことはとても人間わざでは不可能と言える。

伝道共同体と礼拝共同体の統合としての教会に仕える牧師として、様々な取り組みがあるなかで、主日礼拝にしぼって、礼拝を司る者としての牧師のアイデンティティを考察して見たいと思う。

礼拝を司る牧者として、公同礼拝にどのような姿勢で取り組むかが常に問われている。主日の公同礼拝は、ある者にとっては「救いの入口」でもあり、ある者にとっては「救いの成熟」ともなる。ただ言い得ることは、どのようなプロセスであれ、それは、スイスの礼拝学者アルマン (J.J.von Allmen) が言うように「救いが働く一つの道」である。すべての礼拝者にとって「神の像への回復」の場が公同礼拝と言える。だから、礼拝を司る牧者にとって礼拝に対する絶対不可欠な目的意識は、その礼拝の中で、すべての礼拝者に神の像への回復のみわざが何らかの形においてなれることを信じ期待することである。礼拝の中で、礼拝者に何らかの形において救いのみわざがみ言葉と聖霊によってなされることを祈り、期待しない牧者がいるとすれば、神の羊を牧するという牧師のアイデンティティを喪

失した牧者と言われても仕方がない。

そこで、礼拝を司る牧者の具体的な共同礼拝への取り組みにおいて二つの面があげられる。第1は、牧者の預言者的要素であり、第2は、牧者の祭司的要素である。預言者的な要素としては、礼拝のバルテ・デイ、いわゆる啓示的要素における神の言葉に仕える奉仕である。祭司的要素としては、バルテ、エクレジュイ、つまり、神の民を導いて神に近づける応答的要素である。バルテ・デイにおいて、聖書朗読、説教、聖礼典（ sacrament ）という「神の言葉」の3つの様式をもって神は礼拝者に臨在する。この神の言葉の伝達のみ言葉と聖霊によって正しく、生き生きとなされる時、バルテ・エクレジュイである、祈禱、讃美、献金、信仰告白などが聖霊の働きの中でまた生き生きとなされる。そこで、ついには、神に近づき、神を拝するというヴィジオ・デイを体験した礼拝者が神からこの世に派遣されるというミッシオ・デイに至るのである。この「集められ」「派遣される」というダイナミックなアクションがなされるところが共同礼拝の場である。神からの召しを受けて、礼拝を司る牧者は全人格を投入してこの聖なるわざにあたるのであるが、その牧会的努力を共同礼拝に限って具体的にあげるとすれば、説教努力と礼拝者に礼拝行為の本質と実際のすばらしさを徹底させることであると私自身は考えさせられている。

欧米のオーボルン神学校やユニオン神学校で学ばれ、神戸中央神学校、関西聖書神学校、関西聖書学院などで長年説教を講じてきた長谷川計太郎は、「世界三大教会の共同礼拝の特徴」をあげ、ならびに「我らの説教努力」を講じている。それによれば、東方教会の共同礼拝の特徴は信徒の側から言って、聖職者によって儀式的に演じられるキリストの出来事と生涯を「見る礼拝」であり、椅子のないフロアに「平伏す礼拝」であるという。ローマ・カトリック教会の礼拝の特徴は、「聖変化」した「聖体」を拝領する「食べる礼拝」であり、また、十字架を切りつつ「跪く礼拝」であるという。一方、プロテスタント教会の共同礼拝は聖書的説教を長時間、「聞く礼拝」であり、固定祈禱、成文祈禱、印刷祈禱なしで自由に祈る「目をつぶる礼拝」であるという。プロテスタントの共同礼拝の説教の位置づけは、前二者のそれと比して、極めて大きい。ウィングレンは「神はその人類救済活動を通じ、今日に至るも、これを継続されておられる。その方法が説教である。説教によりて神がサタンとの戦いにおいて決定的勝利を得たもうことを全世界の人類に宣べ伝えておられるのである。この宣教がなければ人は皆、失望、絶望のうちに滅びるものである。こんなわけで世界で説教ほどの大事業は他にないのである」と断言している（長谷川計太郎『厳かな人生の事業』長谷川計太郎遺稿集刊行会、1975年、64頁）。レイモンド・アバは、説教に関するプロテスタントの古典的概念は、カトリック教会のミサ観と類似する。真実な説教においては、真実な礼典におけると同様に言葉以上のことがらがなされていると述べている。そして、本質的に説教はキリストにおける神の救いのわざを媒介する秘儀的行為であって、両方ともキリストの真の臨在を媒介することにかかわっているという（レイモンド・アバ『礼拝-その本質と実際』日本基督教団出版局、1977年、80-81頁）

私は、香登教会の礼拝説教者として11年を経た。多くは、講解説教であり、それも一書の連続講解説教であった。エペソ書、ピリピ書、第1テサロニケ書、ガラテヤ書、ローマ書などがそれである。「主イエスに出合った人々」という主題で、新約聖書の人物を扱った説教もあったが、テキストの取り扱いそのものはそのほとんどが講解説教である。現在は『現代聖書神学事典』の執筆依頼の中から導かれ、主題的には旧約聖書の中から「祈り」

についての説教に取り組んでいる。むろん、クリスマス、受難週、イースター、ペンテコステなど、教会歴を考慮した説教、必要に迫られて、連続した聖別説教や伝道説教も講じてきた。一人の聴力障害の老姉妹に前もって説教をファックスするところから、それを「求める礼拝者」にB4サイズにあらかじめ書かれた説教「香登使信」を毎週、提供してきた。教会の教育部の重荷や要望から、それらに幾分か手を加え、キリスト新聞社やベラカ出版社を通して出版されてきた。「香登使信」を出すことの是非については何とも言えない。説教の助けになるのか妨げになるのかもわからない。ただ、会衆のある者は説教前に目を通したり、多くは説教後に読んでおられるようである。説教中は説教者に目を注ぎ耳を傾けてくれている。

説教努力と共に、礼拝の諸要素を礼拝者に理解させることにおいては礼拝行為の中で体験して頂く以外にない。ただ、一度、二度、共同礼拝の中で、報告の時間の前後であったと思うが、「礼拝を10倍楽しむ方法」と言ったプリントをつくり、数主日、「5分間セミナー」の形で、聖書朗読、説教、交読文、聖礼典、讃美、祈祷、信仰告白、献金、報告、頌栄などについて極めて短く解説し、礼拝行為の意義とすばらしさを礼拝者とわかちあったことがある。これを主日礼拝以外の例会か何かのセミナーで行えばいいと思われるが、そうすると残念ながら、出席する者は礼拝者の一部で全部には徹底できない。

最後に、牧師が牧師であることの存在意義を、ウエスレーやメソジスト教徒のうちに見習いたい。あえて神学や教派にとらわれず、18世紀の一信仰者群像として教えられたいと思う。彼らの中にある本質的確信とは何だったか。むろん、それはメソジストたちのグラント・デポジタムであると共に、すべての牧師たちが共有すべき「大いなる供託物」であると彼らは確信していた。そのメソジスト達の本質的確信とは何か。ここに何時の時代であっても牧師がもつべきアイデンティティが横たわっていると思わされる。

All need to be saved. (すべての人は救われる必要がある)

All can be saved. (すべての人は救われ得る)

All can know they are saved. (すべての人は自分が救われていると知ることができる)

All can be saved to the uttermost. (すべての人は最高のところまで救われ得る)

All are saved to serve. All saved people are one with other saved people.

(すべての人は仕えるために救われ、すべての救われた人々は、他の救われた人々と一つとなる)

All the world is our parish. (全世界は私たちの教区である)